

日本基礎教育学会

(The Japanese Association of Fundamental Education)

一緒に21世紀の日本の教育を考えましょう。

会報 No.46

令和4年12月25日

令和4年度 日本基礎教育学会月例会

日本基礎教育学会では月例研究会を持ち、先駆的な実践を進めておられる先生方より報告をいただきながら、基礎教育のあり方について、研鑽を積んできた。今年度の研究テーマは、「危機の時代からの再生に果たす基礎教育のあり方」と設定した。コロナ禍にあつて、教育現場は、通常の学校の運営ができない日々を過ごしている。子どもたちへの影響も計り知れないものがある。この危機の時代の中で、子どもたちに何が起こり、教育現場をどう支えていくのか、日本基礎教育学会は、全国研究大会、月例会と、年間を通して基礎教育のあり方を検討してきた。月例会の内容は以下の通りである。

<第1回 Zoom 月例会>

- 1 日時 令和4年10月1日(土) 15:00~16:30
- 2 発表内容 「小学生の地域に関わる学習についてのアンケート調査結果の報告」
- 3 発表者 富永 弥生(常葉大学)
- 4 研究協議 発表をもとに、教育現場はどのような学術研究を期待するか、初学者はどのように研究に取り組むことで、研究者としての基盤が形成されていくのか、意見交換を行っていく。

<第2回 Zoom 月例会>

- 1 日時 令和4年11月5日(土) 15:00~16:30
- 2 発表内容 「児童の数学的な見方・考え方を育てる算数指導」
- 3 発表者 田中優人(埼玉県入間市立豊岡小学校)
- 4 研究協議 「児童の数学的な見方・考え方を育てる算数指導」について、参加者が取り組まれた実践も報告いただき、より効果的な指導のあり方について意見交換を行っていく。

<第3回 Zoom 月例会>

- 1 日時 令和4年12月3日(土) 15:00~16:30
- 2 発表内容 「体育系小学校教員養成における「英語絵本」の活用」
- 3 発表者 五十嵐浩子(国土舘大学)
- 4 研究協議 教員経験が数年という教員に、教員養成での学びが現場での指導にどう活かしているのか、報告もいただく。発表と併せて、教員養成のあり方について意見交換を行っていく。

今年度の月例会も、コロナ対応のため、すべてWEBでの開催とした。富永氏は家庭科、田中氏は算数、五十嵐氏は英語、それぞれの専門教科を切り口に、これからの学校教育を支える提案をされた。

文部科学省は、今年度の全国学力・学習状況調査の結果を公表した。新型コロナウイルス感染症の影響による臨時休業等の日数も、短縮授業・分散登校の日数も、減少してきており、「学校に行くのは楽しいと思うか」との質問に肯定的に回答した児童生徒の割合は、昨年度と比べて横ばいの状態となっている。一方、「今住んでいる地域の行事に参加しているか」との質問に肯定的に回答した割合は、昨年度と比べて特に小学校の児童で減少しており、まだまだ児童生徒が日常生活を取り戻せる状態にはないことが推測される。

以下、今年度の月例会の報告を掲載する。学会として共通理解を深め、この困難な時代を支える基礎教育のあり方を今後とも求め続けていきたい。

(文責 高橋)

家庭科では、1999年告示学習指導要領及び解説から目標及び内容に地域にかかわる文言が明示された。「地域」にかかわる授業実践は1970年代から取り組まれ、学びが深かったが、しだいに単に「地域」の人や施設を活用したりする事例が多くなり、形式的になりつつある。

東京都内A市にある3校の6年生児童を対象にアンケート調査を実施し、児童が地域をどのような範囲でとらえ、教科において取り組まれた地域学習をどのように評価しているのかを分析し、家庭科の地域に関連するカリキュラムモデルの構築の基礎的資料を提供することを目的とした。

調査の結果、児童は、学区域外の施設も含め、広い範囲で地域をとらえていることが分かった。地域にかかわる学習で分かったこと、できるようになったことがあると肯定的な回答をした児童は7割を超えており、生活科・社会科よりも、家庭科・総合的な学習の時間での評価が高い傾向にあった。

今後、「地域」の範囲、「地域」に関連する学習の実態、地域に関わる学習への興味関心の相関関係を分析するとともに、地域に関わる学習で特におもしろかった学習、もっと学びたかったことなどの自由記述を、カリキュラムモデルの検討に生かしていきたい。

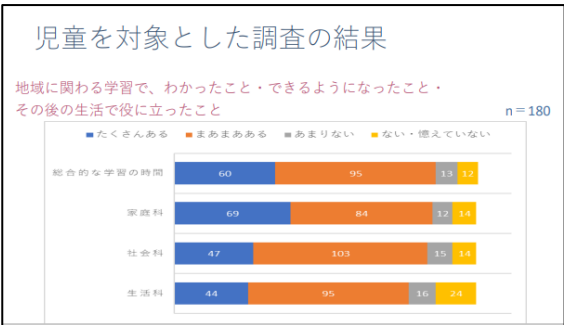
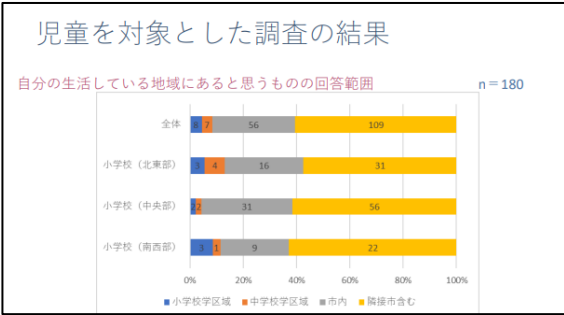
【参加者からの意見・感想】

- 研究のねらいを達成するためには、学校をどう選択するかが大きく影響する。区部、市部によって生活圏は異なり、自動車保有率なども生活圏に関係してくるのではないかな。補助資料として示してもよいのではないかな。
- 児童が地域、近隣の施設をどのように活用しているか、学校にとってカリキュラムを構築していくうえで大切なデータとなる。学校に役立つ研究に取り組まれている。今後とも研究を継続してほしい。
- 学校との連携には同じ市内でも地域によって違いがある。研究によって、地域差を一般化できるとよい。学校が変わると、地域も変わる。学校が地域を生かしたカリキュラムを作りあげることが、地域も変えていく。
- カリキュラムを作るには、若手から経験を積み重ねていくことが大切である。学校を上げてカリキュラムを作成することは、学校の活性化につながっていく可能性がある。
- 大学の研究者と学校現場には、相いれないものもあるが、研究者の視点が入ることにより、学校現場の抱える課題を見直すことができる。

【発表者からのコメント】

この度は、発表の機会をいただき、ありがとうございました。また、第1回月例会にご参加くださったみなさまには、ご助言やご感想、今後の研究への激励のお言葉をいただき、ありがとうございました。学校運営協議会の委員をされているご経験からお話を伺えたことなども大変勉強になりました。報告させていただいた調査結果を今後分析するにあたり、いただいたご助言を生かしていきます。

日々研究活動に取り組む中で、自分の力量により行きづまることが度々あります。今回の発表では、研究の経過を報告させていただいたことから、今後への期待のお言葉を賜り、気持ちを新たにできました。日本基礎教育学会が、後進を育成してくださる貴重な組織であることを実感しました。今後ともご指導のほどよろしくお願いたします。



現在、学校でもタブレット活用などのICT化が急速に進み、令和の学校教育が求められている。まさに、自ら考え、自らの活動を振り返り、さらに考えを深めていく「主体的・対話的で深い学び」の実現が急務である。学習指導要領では、その鍵として、児童の「見方・考え方」を働かせることが重要になると示された。

学力調査の結果から、第6学年のデータの活用領域において、データ分析に課題があると判明した。そこで児童がデータ分析を基に考察し結論を求め、その妥当性について批判的に考察する力を高める授業改善に取り組んだ。

改善の目的として、①児童がデータを分析する力を高める。②児童が資料を基に考え結論を求め、その妥当性について批判的に考察する力を高める。の2点を設定した。①では、同じデータを使っても、一覧表、ドットプロット、ヒストグラムに表すことで、分析結果が変わる可能性があることについて扱い、児童のデータ分析の視点を増やすことができた。②では、児童が単元を通して育てた分析力を活かして自分なりの結論を出し、それぞれの結論に対して別の視点から批判的に考察する場面を設定したことで、考察力をより高めていくことができた。

検証授業は、習熟度別学習で進めた単元の最後に実施し、児童に身近なおこづかいを取り上げ、クラス全員のもらっているおこづかいの金額データを基に、自分のおこづかいの金額がどれだけなのかを分析・考察し、おこづかい値上げの説得を考えた。ここに示すノートは、特に変容が見られた児童の、第1時と第8時のノートの比較である。

【参加者からの意見・感想】

①	<2組>
②	平均が12.35...
③	最大が、最小が53
④	合わせた数873



②	<説明>
	ほくは自分のおこづかいをもっと増やしてほしいです。なぜかはこのグラフを見て下さい。(柱状グラフを見せる)この表はクラス全員のおこづかいの金額を表した表です。自分の金額より多い人は70%もいます。さらに、一番多い金額では1200円が自分よりも300円多くもっている人もいます。さかにはさか

発表についての質疑を行った。主な内容は以下の通りである。

○習熟度別で学習を進めていたようだが、他のコースについては、どのように対応していたのか。

➡今回は、発展コースについて発表した。単元の指導計画を習熟度別に作成し、授業を展開している。

○児童が、エクセルの予測機能を活用し、活動を進めていた。成果を知りたい。

➡数値を打ち込むことで、グラフで今後の予測が見通せることに児童は興味を示し、意欲的に取り組んでいた。今後、さらにデータを集め、成果の分析にあたりたい。

5つのグループに分かれ、意見交換を行った。以下、それぞれのグループからの報告を紹介する。

- 1 児童が魅力を感じる授業を展開されていた。教員として学び続ける大切さを実感した。
- 2 この単元を、このように進められるのかと、驚いた。夢中になって学ぶ子どもたちの姿が印象的だった。
- 3 授業改善には、教材研究の深さが前提になると感じた。学び合う中で、児童の視点が広がっていった。
- 4 仮説検証で授業を進めることが、成果につながっている。改めてカリキュラム作成の重要さも実感した。
- 5 習熟度別で授業を進めることで、自分の意見を発表しやすくなる。学び合う関係が成立していた授業だった。

【発表者からのコメント】

この度は、貴重な発表の機会をいただき、ありがとうございました。昨年度研究した実践内容を、この場をお借りして皆様に発表できたこと、うれしく思います。

学校現場では、タブレットの導入、ウィズコロナの生活指導など、急激な変化の波が押し寄せています。そのような状況において、教員一人一人が考え、工夫して活動し、職員間で共有することで、学校全体で乗り越えてきました。目の前の児童も、授業を通して、考え、伝え、分かり合う経験を重ねることが、変化の激しい令和の時代を生き抜く力を高めることにつながると信じて、これからも日々授業に取り組んでまいります。

国士舘大学子供スポーツ教育学科では、体育の得意な小学校教員を育成することを目指している。外国語の指導のコアカリキュラムにおいては小学校教員でも CEFR B1 相当の英語力が求められているが、かなり高いレベルである。外国語の指導法に配当されているコマ数で対応するには工夫が必要である。英語の楽しさを実感してほしいと願って、絵本を用いた帯活動を実施した。絵本は、絵の助けがあり、まとまりのある表現がされており、有効な教材であると考えている。英語絵本をただ読み聞かせるだけでなく、児童が聞いていることを想定して、発音、抑揚、スピードを調整し、teacher talk も工夫させた。

実践後に記入させている「読み聞かせレポート」より、成果を分析した。実践にあたって留意したこととして、英語教材や検定教科書の各 Unit のテーマに合う教材の選定、発音への注意、反応を促す指導の工夫をあげる学生が多かった。「準備をしっかりとすることで自信をもって実践できた」「英語力・指導力の課題を認識できた」という声も聞かれた。

【参加者からの意見・感想】

6つのグループに分かれ、五十嵐先生の発表をもとに意見交換を行った。次のような意見が出された。

- ・絵本を英語指導に導入することに可能性を感じた。取り入れて授業で行ってみたい。
- ・幼稚園でも導入できる内容であり、幼児期の異文化体験にも通じると感じた。
- ・絵本を使った実践に興味をもった。子どもの学ぶ意欲につながる。英語絵本を教室に置くことも試みてみたい。

増田会長のリードで、教員2年目の岡本先生、飯田先生にお話いただいた。岡本先生は長野市の中心部の大規模校で2年生の担任、飯田先生は新発田市の山間部の小規模校で2年生の担任をされている。英語教育の実践に関して、学級活動に位置付け、学期に1、2回、ALTが入って行っているが、全体を取りまとめる教員はなく、それぞれが工夫している状態だという。業務に関して、初任者研修は大変だが、それをやり遂げることで、自信につながったとされ、教員1年目にすべきこととして、飯田先生は、たくさんの授業を見て技を取り入れること、岡本先生は、書類が多いため整理整頓の能力を身に付けることをあげられた。教職の魅力を、飯田先生は「子供の成長に感動できること」、岡本先生は「子供の幸せを全力で応援できること」と話された。

最後に仲井先生より、学校では、家庭・地域とのつながりも重要であり、情報を得る努力により、自分のすべきことがより明確になってくるとお話をくださった。

【発表者からのコメント】

今回は、英語絵本の読み聞かせを取り入れた実践を発表させていただきました。

学生が読み聞かせている映像はすべて保存してあり、彼らが生き生きと読み聞かせをしている姿をご覧いただきたかったのですが、それをオンラインで披露することは、公衆送信上の制限があり、叶いませんでした。英語が苦手でも、英語を使った楽しい経験をさせることをずっと求めてまいりました。英語のコマ数は少なくても、与えられた時間で学生の英語力や指導力、さらには ICT 活用指導力も伸ばせるよう、授業改善に取り組んでまいります。

選定理由

選書範囲

大学図書館の絵本、研究室の絵本、自宅等にある絵本

分類項目	人数(%)
Unitのテーマ・題材に合う	25(45.4)
Unitの言語材料がある	21(38.1)
繰り返しが多い	11(20.0)
英文が易しい聞いて分かる	9(16.3)



重要だと考えた指導技術にかかわる項目

分類項目	人数(%)
質問したり反応を促したりする	27(49.0)
日本語の解説・訳をつける	16(29.0)
易しい表現に言い換える	12(21.8)
Teacher talkを行う	12(21.8)
できるだけ日本語訳をしない	6(10.9)